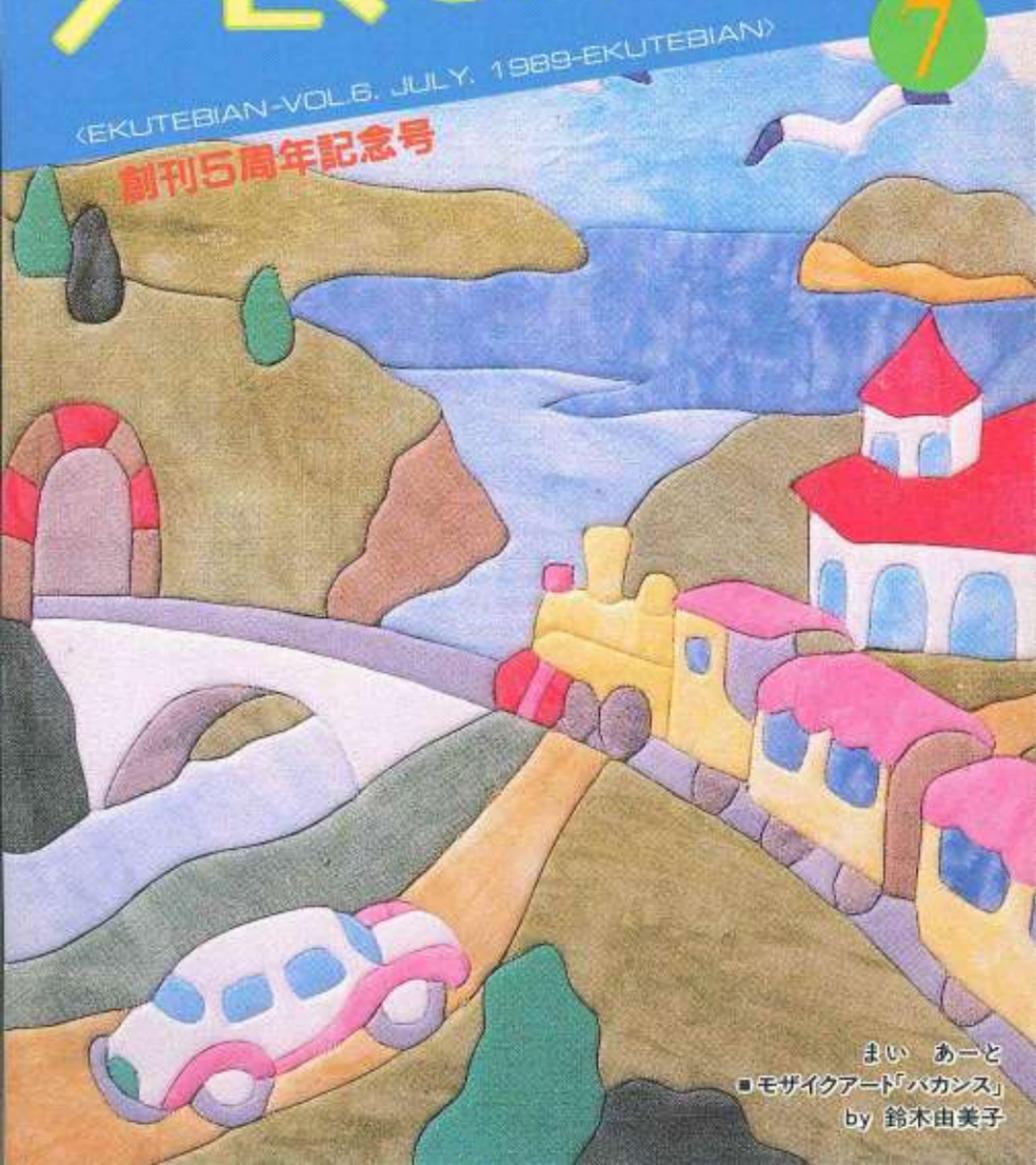
月刊
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあん
7
〈EKUTEBIAN-VOL.6. JULY. 1989-EKUTEBIAN〉
創刊5周年記念号
まい あーと
■モザイクアート「バカンス」
by 鈴木由美子

夏（なつ）に涼風（すずかぜ）

日本の夏は高温多湿で、じめじめと暑い。だが感性の鋭い先人はこれを即物的に解決するのではなくこころに「涼かぜ」をおくる方法を編みだす。蕪村に……………………

青うめを　打てばかつちる　青葉かな

……………………という句がある。茶道の世界もまた夏をさわやかにしてくれる。色、形、味、音がかもし出す涼やかなシンフォニー！

協力／岩田宗味師

灯●やわらかく包む光

爽●庭にみちる打水

芳●静寂のなかに葉がかおる

浄●きよらかに庭を満たす

宗味師によるお手前

●柴崎町一丁目「小川保寿苑●宗味庵」にて

ヒマラヤ・チュルー南東峰

未到の山に挑む12人

日本で初の登山海外遠征（昭和47年）を果した立川女子高山岳部。幾多の山を征し、7月30日には6400mのチュルー南東峰（ネパールヒマラヤ中部）に挑む。

隊長●高橋清輝さん

昭和四七年、高校生として日本初の海外遠征を果した高橋清輝さん（部顧問）。

「今回の海外遠征で7回ほどになりますが、内5回が学園の部員たちとです。3年をかけて計画するんですが、その間に生徒自ら志した登頂への気持を大切に育てていく、また発した思いの力がアタックの時に強さとなって体中に現われてくるんですよ。これが、押し付けだったりしたら、登ることは出来ないでしょうね。よく"山のよさ"などといわれますが、豊かな大自然と自分が一体になれることですね。それからなんといっても、自分と同じ苦痛と汗をかいてきた仲間と共に行けることが一番じゃないかと思います」と、チャレンジャー達を率いる隊長高橋氏

隊員●七里蘭子さん

在学中、最年少でヒマラヤ遠征に参加したんですが高山病で登頂できず、カナディアンロッキーの時は結婚や仕事で参加を断念。私の二度の無念な思いを家族は知ってるものですから、今回の遠征参加を主人は快諾してくれますし、3才の娘の面倒は、北海道の姉と実家の父と二人でみてくれる事になりまして。土日の合宿には出来るだけ参加したり、足腰を鍛える訓練をいろいろしていますが、その間、子供は主人がみてくれて、本当に有難いと思っています。私、何かにかけて毎日感動して生きていたいんです。娘もさみしいでしょうけど、いつか同じ女としてわかってくれると思います。今は毎日張りがあって震えが来る程嬉しいです。

隊員●森川道子さん

今回初めての海外遠征という森川さん。「卒業して2年が過ぎましたが、チュルー南東峰アタックの朗報を聞いて"よし"と気合が入りました。高校に入るなら、海外遠征をし登山では名門と聞いていたここしかない、その山岳部に、と思っていました。入ったものの、朝レンで重い荷を背負っての練習は、ほとほと身にこたえました。しかし、目的のためにはと、努力重ねてきました。山を登っているときは、なんて苦労して登らなきゃいけないんだろうと思うんですが、頂上に立つと次は……と、新たな活力が湧いてくるんです。登る時、気持の中で皆とひとつになり、共に皆のことを思うことが大切ですね。技術より心と心の結びつきかな」

カメラ●玉川雅和さん

ビデオカメラマンとして同行します。実は立川女子高山岳部の初めての海外遠征に父（雅さん）がカメラマンとして同行してまして、その縁で今回私が参加することに。登山経験がないので迷ったんですが、父の跡を継ぎたくて決心したんです。以来、合宿に参加して登山訓練をしたり走って体力作りをしたりしています。機材が数キロあるうえ、撮影のために隊員のリズムを狂わせる事はできませんから、後ろから少し撮影してすぐ追いかけたり、休んでる時に先行して、登って来るのを撮ったりする事になると思いますので、いろいろ厳しいですね。でも行くからにはぜひ頂上に登りたい。とにかく頂上での撮影は絶対にしたいですからね。

漢字テスト㊷

空欄に一字挿入を試みよ。

▶●子奮迅

▶遍地●花

●7月22日(土)開催●
国営昭和記念公園花火大会
'89ミス立川コンテスト
※詳しくは☎24−2105

連載・2 AIR MAIL 中華人民共和国→立川

えくてびあん エア・メール■ボックス

昨年九月に北京に来ましたが、この年（69才）にして元気にて北京の冬も無事に過すことが出来ました。私の仕事ですが、日中友好技術指導として北京に参りまして製餡（あんこ）の技術指導にあたっています。工場は国営で、従業員は20代～30代の人達が100人位、勿論皆公務員です。こちらに来て技術を指導する前にした事は、いい物を真心こめて作れば収入が増え自分達の生活向上につながっていく、それを伝える事でした。中国側の皆さんの暖かい心づかいにて、又若い人達が一生懸命に努力なされ、あんこも順調に大量生産出来るようになりました。

ここで作られるあんこの原料は天津小豆といい、吉林省、黒龍省（どちらも旧満州）、河北省がその産地です。出来た製品は国内で使われる他、日本（横浜）、バンコック、シンガポールに輸出されています。

昨年十二月、食品博覧会が北京で開催されました。初めてのことで、大へんなにぎわいでした。工場でもあんこを出展いたし、美味しいと好評を博しました。日本は中国から一番買ってくれるお得意さんだから根岸さん代表で、ということで私も北京市から招待されました。同封の写真は、その時のものです。色々と書きたいことはたくさんありますが、帰国いたした際にお話しいたす考えです。

根岸敏治さん（柴崎町4丁目）
製餡技術指導のため北京へ

根岸さんは、この程、中国の状勢変化のため急遽帰国された。事態が悪化する一方なので、やむなく大使館を通じて準備をし、空港までの道も大使館の旗をつけた車でやっと通過するという混乱の中での帰国だったとか。えくてびあんを来訪された元気なお姿に編集員一同ホッとしたが、「仕事をそのままにしておけませんから」と、中国側の状況が落ち着き次第また北京に戻られるとの事である。

「大会新」ぞくしゅつで盛りあがる

第6回東京都下ジュニア陸上競技記録会（主催・東京都下陸上競技連合）が、6月3・4日の2日間にわたり立川市営陸上競技場にて開催された。雲ひとつない天候のなか、28団体の選手は各種目に日頃鍛えあげた力を存分に披露した。中学の部では、二百、八百メートルを初め7種目に大会新記録が、高校においては、8種目の大会新記録が生れた。昨年『ベスト立川人展』（えくてびあん編集工房主催）に選ばれた小林徹君（九中出）、百メートル競技において、11秒03の大会新記録を出し優勝した。

一層の活躍に期待したい。

立川・トピックス

"ボーチェ・たちかわ"東京代表に

合唱運動が盛んななか、第12回全日本おかあさんコーラス東京大会が6月3・4日の両日、立川市民会館・昭和女子大人見記念講堂にて行われた。ぬけるような青空のなか、59団体約千九百名の声が爽やかに響いた。審査により15団体が大会賞を受け、さらに5団体が東京代表として8月27日に広島厚生年金会館で開かれる全国大会への出場権をえた。この大会で立川合唱連盟の一員であるコーラスグループ『ボーチェ・たちかわ』（林みち子さんを初めとする45名より構成）が選ばれた。全国大会には約600団体が集うが、豊かな立川のコーラスの華が咲くように、こころから応援したい。

立川クイズ

「北極の雷」という言葉を耳にしたことはありませんか。今ではほとんど使われなくなりましたが昔は立川周辺独得の表現だとか。さて、その意味は？

①北で鳴るから北（着た）なり。いつも同じものを着ているさま。

②北極で雷が鳴っても影響はない事から、痛くも痒くもないこと。

③北極の雷など誰も見たことがない。つまり、見たことも聞いたこともない、という意味。

〔先月号の答〕❷
天皇陛下が皇太子であられた昭和16年10月28日学習院初等科2年生として立川飛行場をご見学に。

表紙は語る

まい あーと■モザイクアート
「バカンス」by 鈴木由美子

「この作品を作ったきっかけですか…、会社の文化向上の為かな？」とは、八王子小宮町にお住いの鈴木由美子さん。多摩中央信用金庫に勤めて5年というキャリヤウーマン。「うちの会社では年に一度、会社あげての文化祭（役職員作品展）がありまして、役職者から各支店のひとまで含めた大展示会が行われます。絵画・書道・工芸等に分れ、今回は90点からの出品となり年々盛んになってます。主催が厚生課なので関係深い課にいる私としては、率先参加し盛り上げなければいけなくて、毎晩せっせと制作に励みましたね。手先が器用でない私にとっては大変でした。でも、出来ないながらも目標をもって向かっていくと、自分でも気付かない力が湧いてくるんですよね。気がつくと、自分でも目を見張るほどの出来にビックリでした。目標を持ってトライするって大切だなとジワリ、ジワリと身に感じてきました」と、鈴木さん。プロとして時を重ねて作品にしていくこともすばらしいことではあるが、苦手ながら努力しその中から得た喜びもまた、すばらしいことだと思う。ちなみに、この展示会、厚生課主催だけあって健康診断の日に合わせて行うそうである。

真如苑だより

五年間、ひと月も欠かすことなく立川の皆さまに、ご来苑いただきました。夏も冬も。これからもどうぞ、よろしくお願い申します。

七月の真如苑は、ことさらに涼やかです。おそろいでお出掛けください。

■日時　7月15日(土)　3時～5時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

漢字テスト・答え

獅子奮迅（ししふんじん）

遍地開花（へんちかいか）

[illegible]

工房から

●いま、この国では芭蕉ブームだそうですが、別にブームでなくとも人間はみな「百代の過客」にはちがいありません。大河を笹ぶねで渡るような、あやうい存在のなかにも人は何かを築こうとしています。●春には立川駅百年を祝い来年は市政五十年。えくてびあんはこの号で五周年を迎えさせていただきました。わずか五年、されど五年という心境です。●もともと年数だけを誇るのは愚かなことです、手をこまねいていれば時は過ぎて行くのですから。時のなかに「何か」をどのくらいこめられるか。新連載『わが家は三代目』を通して、時の重みを感じていただければ。ちなみに、時の記念日はもう過ぎました。●沖雲の白きは白し えくてびあん。

（編集）石塚敦美　小川知子　神山清子　徳川理　田中恵子　中村桂里　半沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269　桂川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第60号
平成元年七月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイツ501　〒190
電話　〇四二五(28)0082
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

我家は3代目

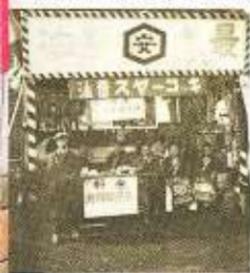
時の流れにコク増して

老舗といい暖簾の重みという。それも３代つづけば語り尽くせない物語があろう。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそこここに隠されている。

▲門柱にかかる看板の薄れた文字が、重ねて来た年月を物語る。

村野醸造場

砂川出身の初代が駅近くで商いを始めたのが明治43年。強制疎開等、戦中戦後の困難な時代を乗り切った2代目は早く亡くなる。三代目安成氏は女手で暖簾を守る母、祖母の苦労を見て育ち、迷わず家業を継いだ。緊張、不安の就任時から20年、平成の未来に期す胸のうちは――。

▲安成氏が中学生の頃、この上で逆立ちをした事があるという煙突。

大正14年、農事試験場(現農業試験場)での醤油"新作"発表会のひとコマ

左・安孝さん／中央・安成さん／右・茂美夫人

▲商標「キッコー安」は初代安五郎氏の名前から。３代目は襲名こそしなかったが、"安"の一文字をしっかり受け継ぐ。